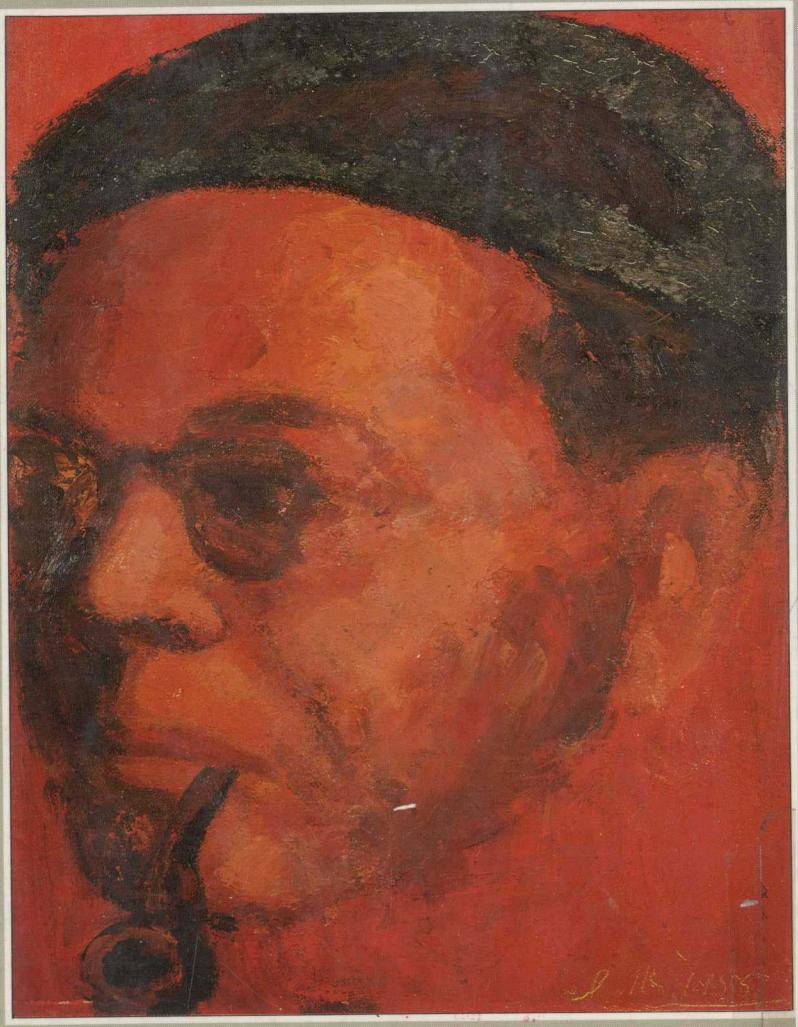
泣かぬ鬼父三好十郎

三好まり



東京白川書院

鬼父三好十郎

三好まり

東京白川書院

三好 まり（みよし まり）
一九三七年一月六日、東京杉並区方南町にて三好十郎の長女として生まれる。恵泉女学園高等部を経て、一九六〇年に早稲田大学文学部卒業。同年、白木茂と結婚。一男一女の母。

泣かぬ鬼父三好十郎

昭和五十六年九月二十八日　第一刷発行

©1981

著者　三好まり

発行者　松本市壽

発行所　株式会社東京白川書院
東京都新宿区早稲田鶴巻町五〇八
電話(03)二〇四—一八六一(代表)
振替　東京　九—一七六四五〇

印刷所　広研印刷株式会社

製本所　東京美術紙工

定価　1200円

乱丁・落丁は、御面倒ですが小社読者係宛にお送り下さい。送料は小社負担にてお取替えいたします。

書籍コード　0023—8129—5376　Printed in Japan

上右：まり三歳の頃父写す（昭和14年2月）
上左：愛車を駆る丸山定夫（昭和13年3月）
下：方南町の裏庭にて母写す（昭和13年6月）

上：多摩川畔ピクニックで母と（昭和13年8月）
下：まり恵泉高校卒業式の日に赤堤の自宅で（昭和31年3月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

桃樹十郎

下：父の肖像（昭和32年・撮影白木茂）
上：色紙筆墨

泣かぬ鬼父三好十郎

目次

遺された譜面と絵　7
疎開と敗戦と　17
丸山定夫さんの想い出　30
戯曲研究会と戯曲座　44
父の中に感じた違和感　62
新宿の街　82
「炎の人」上演のころ　95
想い出断片　113

思春期病　124
父の愛情　137
ケーキと大福　150
いろいろな人々　164
父の死　183
亡き父への鎮魂歌（レクイエム）　199
あとがき　209

カバー絵　三好十郎

表紙絵　麻生三郎

泣かぬ鬼父三好十郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

遺された譜面と絵

戦災に遭わなかった我が家、というより母の家には、父の著作、原稿、日記、スクラップ・ブック、劇場のプログラム等が、ほとんど全部遺っている。

押入れの中には、洋服箱のような大きな箱があり、その中はぎっしりと写真が入っている。すこし茶色がかった子供の写真が、数えきれないほど入っている。沐浴している赤ちゃん、丸々とふとった裸の赤ちゃん、笑った赤ちゃん、泣いている赤ちゃん、ヨチヨチ歩きのもの、食事中の幼児など、日常生活の中のありとあらゆる子供の姿が写っている。この子供が、私の幼いころである。

昭和十五、六年頃の写真雑誌に載った、大きなものもある。これらの一枚一枚の裏には、写真機の種類やデータが、父の手によってきちんと書かれている。

三十六歳ではじめて父親となり、仕事も手につかないようすで、赤ん坊の私のまわりを写真機を片手にウロウロしている父の姿が、このような赤ん坊の写真の中から顔を出す。

とにかく、あの戦争の色がだんだん濃くなっていく時代に、あれだけの写真を撮りまくっていたとは、一体、何だったのだろう。

私の名前は、父の友人でその当時「新劇の団十郎」と言われていた俳優、丸山定夫さんがつけてくれたものである。男の子だったら「彦十」、女の子だったら「まり」と決められている中、一月の寒い日に私が生まれた。

父の作品に、「彦六大いに笑う」というのがある。これは私が生まれる前の年（昭和十一年の八月）に、井上正夫演劇道場が初演し、このシナリオを『映画創造』に、戯曲を『新演劇』に、それぞれ発表して、「彦六」の話題がそのころ、父のまわりを吹きまくっていた。彦十とは、その「彦」と父の十郎の「十」をくっつけて、彦十である。なんだか侍のような、妙な名である。

よく父から「まりが男の子だったら彦十だね」と言われたが、私は、男に生まれないで良かったと思ったものだ。

「まり」という名のいわれは、父から聞きそこねたけれど、だいぶあとになって、むろん丸山さんも亡くなり（昭和二十年八月十六日、八月六日の原子爆弾によって死亡）、父も亡くなったあとで、丸山さんの前の奥さんだった人から「まりちゃんていう名前は、当時、たくさんいた丸山のガール・フレンドの一人の名前で、カフェーの女給さんだったかなァ」ということを聞いたことがある。

こんな風にして名前をつけられた赤ん坊の私は、もちろん、父からも可愛がられたし、子供のな

い丸山のおじさんにも、「まりちゃん、まりちゃん」と可愛がられて育った。

私が、ぐずぐず言っていると、丸山さんは廊下に四つん這いになって、ある時は犬になって、またある時は馬になって、大きな鳴き声をしながら這いずり廻ってくれた。それでもまだ、私の機嫌が直らないとみるや、ひょいと私を自分の大きな掌に乗せて、廊下を行ったり来たりして、私をこわがらせ笑わせて遊んでくれた。うたを歌ってもくれた。歌いながら大きな動作をするので、それを見ていると自然におかしくなってくるのだ。たいがい即興のうたなので、幼い私は最初、丸山のおじさんのことをうたを歌う人だと思っていた。

築地小劇場時代のお仲間が丸山さんについて書いたのを読むと、彼は、築地小劇場の研究生になるまで、浅草の金竜館オペラの仲間のコーラス・ボーイと一緒に下宿住いをしている。そして、築地小劇場が出来ると、その宿直員となって、舞台裏のピアノの前で日がな一日中発声練習をしていたとある。

父の日記に、私が三歳の二月、「丸山、まりと二時間、あそんでくれる」と書いてある。私の相手をしてくれながら、よくひびく透る声で、うたを歌ってくれていたのである。

父は、よくギターを弾いていた。夕食がすむと、日課のように書斎のすみに置いてある古い譜面台とギターを取り出して、ポロンポロンとやりだした。それが、いつも一時間くらい続いた。気が乗ると、うたを歌う時もあった。

時々、私は父に呼ばれた。父の横に立つと、うたを教えてくれた。

フォスターの曲や、ドイツ民謡、イタリー民謡を、口うつしで教えてくれた。私は、「まり、おいで」と書斎から大声で父に呼ばれても、いやがることがあった。すると、書斎から出てきて、私の機嫌をとって、かならずといってよいほど書斎に連れていって歌わせるのだった。

なぜか「青葉の笛」という歌が好きで、このうたをよく歌わされた。

「一の谷のいくさ破れ、うたれし平家の公達あはれ……」

と、私には意味がよくわからないけれども、うっとりと、ギターを弾いてこの青葉の笛を歌っている父は、このうたがよっぽど好きなのだろうと思ったものだった。

先日、このうたをラジオでふと耳にした時、うす暗い書斎の中で、タバコの煙のうすむらさきの色や、父のギターを弾いていた姿を思い出した。

この「青葉の笛」のうたは、平家滅亡のことを歌ったものであり、父は、平家物語がとても好きだった。うたを歌い終わると、幼い私に口うつしで平家物語の最初の部分を教えてくれた。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり、娑羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顕はす。驕れるもの久しからず、ただ春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ。ひとへに風の前の塵に同じ……」

と、父のあとについて、私も、お経をよむようにおぼえていった。少しずつおぼえるのが楽しみになって、うたよりもこっちの方がいいと言うと、父は、「ホーッ」といってニコニコしていた。

「ギターは、いつ、だれに習ったの」と聞いても、「独学だよ」と、答えていたが、父が亡くなってから蔵書を整理した時に、かなりたくさんのギターの教則本が、出てきたのである。これらを、パ

ラパラめくってみていると、赤エンピツでアンダーラインが引いてあったり、曲の前に○がしてあったり、譜に▽印がつけてあったり、かなり勉強したあとがみられた。最初の手ほどきは、先生について勉強したらしいが、あとはほとんど独学のようだった。かなりきちんと基礎から勉強していて、練習曲にはいっぱい書きこみがしてある。

昭和十五年の春、私は、オルガンを買ってもらった。最初の頃は、足がペダルに届かなくて、音が出なかった。父が、ブーブーと同じ讃美歌の曲ばかり弾いていた。

しばらくたって、有名な音楽家（ギターリストとして有名だった）が、二、三人の人達と我が家に見えたことがあった。

「今は、私のギターを弾く時間なので、しばらくお待ち下さい」

と平然として、お客さん達の目の前で、ギターを弾きだした。お客さん達は、驚いたらしい。はじめてみえた方達は、変わった人だと思われたであろう。

このギターリストは、だまって父のギターを聴いていたそうだ。

あとになって、このギターリストが、「三好さんのギターは、やめといた方がいい」と、知人に話しておられたことを父は聞いて、苦笑していた。

父は、ギターでうたを教えてくれることによって、私に音感教育をしてくれたのだと思う。

いやがって、いいかげんな態度の時もあったが、さまざまな国の民謡を幼い時から耳にしていたので、西洋音楽に対する理解が、わりあい早かったのだろうと思う。私はいつのまにか、うたを歌

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com